

千歳の鉢

泉鏡花作

全一章

石壇を登り果てると、快く汗になった。小田原は相模の中でも最も氣候の暖な處だとは聞いて居たけれども、然までとは思はなかつた、と我が友は語るのである。去年大晦日。

前夜は酒勾の松濤園に一泊。小田原の町をゆるりと見物して、晩方餘り寒くならぬ前に、函嶺まで徒歩といふ積りであつたから、其日は朝早く旅店を出た。

函嶺行の電車は、昇降の客の有無に係らず、一寸此の門で留るので、ブーンと鳴つて來たのが、がたりと着くと同時に我が友は松濤園を出たのである。

見送つて女ども、

「御機嫌よろしう。」

「お静に行らつしやいまし、お歸りをお待ち申します。」

電車には唯二人乗つて居た。此方を背にした一人が、女の聲に振り向いて、出合がしらの友人の姿を見ると、ぐいと逆に、仰向けに反るやうにして、オウヴァ・コオトの肘を長く、半身を窓から乗出しながら、

「やあ江島。」

「戸田。」と我が江島は應じた。

然うすると向側に腰かけて、制帽 金釦で居たのが、笑つて物静に、

「先鋒何うした。」

「本陣も敗軍と見えるな。」

「殿は正午頃遁げて来る。」と戸田は手を掉つて、

「乗らないか一所に行かう。」

「晩に。これから些とばかり見物だ。」

「江島、落着くさきは環翠樓だよ。」

「可し、」

「左様なら。」

「お静に、」と、又女ども。

電車は中だるみした針線に傳はつて、低きに着くが如く、すら／＼と駈けて去る。

此の間の消息を知るものは知つて居よう。けれども、之は例年々末の落人であつたことに趣味を持つて、故と其の落人に扮したので、大學でも自ら平家方と稱する此の人達。今年は皆業を卒へて秋の末から冬枯にかけて、いづれも懐中は豊なので、めでたく温泉に年を越さうとするのであつた。江島は一行五人の中、眞前に東京を出た。今の二人は沼津泊、彼の環翠樓に落合ふのに、特に小田原見物のために一足後れたのであるから、麥酒の硝子杯を合せの際、何ぞ珍しい土産話を、と約した。

江島はこれから酒勾橋を渡つて、しばらく五十三次の圖にある道中、外郎屋なども見たけれども、別にこれといふ土産もなかつた。

朝末だ早いので、途中、並木にも町盡にも、茶店を開いて居ず。たゞ、藤棚で名の高い竹屋の向うの、電車の待合所に小休した時、其家の亭主が、城の傍の梅林の勝を説いたので、――

風情でも見て行かう。

勿論、早咲の蕾にも七日八日間があると云ふのを承知で来た。

入口が小さな鳥居で、橢圓形の一目潤たる廣場、

舊は馬場であつたさうな。右手は眞黒な森の梢に、
白蛇が衣を脱いで懸けたやうな城の石垣、雪の色に
苔蒸して、蒼空に暗く聳え、左手は遠く、ちらほら
と松の丘、仙家の人の佇んだ趣である。彼方に
こそ、函嶺の嶮ありと聞えたれ。

取着が石段で、上ると一つ、曲つて又一つ、三つ
に蜿つて高い。尚は其の上に杜がある、二ツ目の坂
の中途に詔へたほどの芝生があつて、こゝに一脚の
竹の床を据ゑてあつた。

江島は汗になつたから、上り、上り、鉦を外しか
けた外套を先づ脱いで、向を更へて、腰をかける、
と正面に遠霞、小田原の町は此の一帶の霞の内
にあるのであらう、彼方は長閑な蒼海原、時ならず
麗である。

馬場は目の下に、恰も谷の底のやう。松の丘にか
け、城の山にかけ、段々に圓く二重三重に梅の林、
一面の日向、枯草の上に影も落さず。風あつて枝を
渡らば、此處まで薫を誘つて来よう。特に南向な
るは、遠目にも幹がふつくりして、午過には咲かう
も知れぬ。菜種もありさうな景色であつた。下の段

の傍なる小家の門口に、女の姿、折から懐しの者や
と見る中、此方に上ると見えて、段の折曲つた處で、
其黒髪が一度隠れたが、やがて、目の前へ顔の玉の
如きが顯れた。

黒塗の盆に茶碗、折敷に干菓子を載せて据ゑ、片
手に土瓶を提げて居た、十六か七、まだ八にはなる
まい、竄れた扮装で年紀に似ぬ束髪、無地の浅葱
の半襟は媚かしいが寂しく見らるゝ。

はツちりした目に愛嬌はあるが、下膨の顔の品の
の好さ。江島は物語りに傳へたる眞間の手古那の
倂を見る思がした。敢て此の容色を深山に見る不
思議な感がなかつたのだけれども、これまで過ぎて
来た、大晦日の朝の町は、騒しい中にも寂漠たる
趣が潜んで居るし、昨日の今日で、急に師走の押
詰つた修羅場の如き都は避けたり、殊に此の馬場に
かゝつてからは、樹の影も踏まず、人らしい者にも
出合なかつたゝめに、何となく自から超然として塵
外に在る如き折だつたから。

「これは憚り。」粗茶でござさいます、召しあが

りまし。」と差置いて、盆を客のあたりに密と寄せ
て、

「唯今お煙草盆を、」

「いや、早附木がある。」

と江島は袂を開いて底の方を探りながら、

「暖ぢやあるし、巻苩だから火鉢は澤山、

大變だらう、一々。姐さん、可いよ。持つて来ない

でも。「自分が坂を上るのに汗さへ覺えた程だから、

足弱の勞、然こそと謂ふ思ひ遣りで、

「彼方に店があつたのか。ぢや、其處へ休まして

貰ふんだツけ。」

「はい、否、店を出しては居りません。」

「ぢや尚の事恐れ入る。」と一禮して茶碗を取る。

「何ういたしましたして、」と娘は勞らはれたのを嬉

しさに打微笑み、

「此處へお遊びに入らつしたお方があつたら、お

茶を差上げますやうに父が申しつけて参りました。」

「はあ、お父様、植木屋さんの。」と物和に、

江島は梅林に對して斯う言つたが、餘り飲込み過ぎ

たと気が付いて、

「何を^{なに}して在^いらつしやる、」と問^とひ直^{なほ}した。

「お宮^{みや}様のお守^{もり}をして居^ゐます。」

「あゝ、それでは今^{いま}、坂^{さか}の途^{とちう}中に杜^{しやむ}務^む所^{じよ}としてあつたツけ、姐^{ねえ}さん彼^{あすこ}處^こかい。」

「えゝ、」

「何^どうぞ能^よくお禮^{れい}を言^いつて下^{くだ}さい、大^{たい}層^{そう}御^ご造^{ぞう}作^{さく}になり^なりますツて、」

「父^{ちち}は、あの此^{この}間^{あひだ}から東^{とう}京^{きやう}へ参^{まゐ}りまして、内^{うち}には居^をりませんのでござ^いいます。」

聞^きくと早^{はや}斯^{しか}る處^{ところ}に寂^{さび}しからうとあはれになつた。

「それはノ、而^そして今^{いま}お門^{かど}を通^{とほ}つたツけ、戸^とが閉^{しま}つて寂^{しん}として居^をつたが、小^こ人^{にん}數^ずと見^みえるね。」

「はい、」

「母^{おつ}様^{かさん}と、それから、」

「否^い、母^はは私^{わたくし}の六^{むつ}の時^{とき}なくなりましたのでござ^いいます。」

「ぢや、お婆^{ばア}さん、」

「誰^{たれ}も居^をりません。」

「それでは男^{をとこ}衆^{しう}でも居^ゐなさるのかい。何^{なに}、其^その弟^で子^し、然^さうさな、神^{かん}官^{ぬし}さんに弟^で子^しもをか^かしい。」と

江島は笑つた。娘も莞爾して、

「何もそんな人は居ないんでございますよ。」

「姐さん一人かい。まさか。……」

驚きますね、」

と江島は四邊を二した、城の森の凄いつけても。

「姐さんを一人置いて、何うして東京へなんぞ

行つたんです。」

赤心の籠つて熟と見上げる顔を、娘は立つたまゝ、

やゝ頭を傾けて見たばかり、何にも言はぬから、江

島がまた、

「それでも梅の名所だといふから、些とは遊びに

でも来る人があるのかい、お宮様に参詣の人がある

から、寂しくはないのかね。」

「否、父も其の事で東京へ願ひに参りましたので

ございます。此お宮様は、此國の藩主様の御先組を、

お祭り申してあるのでございますけれども、お参り

の人も少うございますし、また藩主様の方も、間に

人があつて、其が好いやうな事をするのですとかい

ひまして、當社までお手當が行届きませんものです

から、お堂も年々損じますのでございます、其に御

覧なさいまし、あれ、」

と指すに従うて、仰ぎ見る、御堂の棟の銅の屋根、箕の形に岸破と破れて、引裂いた切口が霜柱のやうに刻々にむしられて居るのであつた。

「風ですか、酷いね。」

「貴客、盗賊でございます。」

「盗賊、」

「酷いことをするのでございますよ、最うあの、お堂は雨の漏りませぬばかりになつて居りますのに、其を、あゝやつて剥がしに參るのでございますもの。町の衆に申しまして、面倒ですから構つて下さいません。屋根ばかりではないのですよ、擬寶珠でも、釘隠でも、何でも、貴客、金で出来て居りますものは、毎晩来てむしり取つて參ります。修復をしたくも届きませんものですから、東京の藩主様へ度々願書を出しましたけれども、何とも沙汰はして下さいません、其ですから、例年は元日御年始だけに上りますのを、其の願ひに年の内に參りましたのでございます。」

「留守は姐さん一人きり？」

「春は七草頃歸ると申して出掛けました。」

「困つたね。父上様の留守に其の屋根盗賊が來ないとも限るまい。」

「昨夜も遅く参りました。」

江島は思はず。

「そりや大變、こんな處にたつた一人で、夜中に盗賊が來て、ごそ／＼遣るのを聞いて居て、能くまあ今朝まで生きて居た、嘸恐かつたらう。」と又面をみまもつたが、別に蒼さめても居ず。花やかではないが、沈んでうつとりと美しい。

娘は伏目に、

「はい、恐うございますけれど、何うもしいたしません。目をばち／＼して居りますと、何時でも、然ういふ時は、あの、鶴の姿が見えますのでございます。心細い時でも、寂しい時でも、其が便りでも、何も彼も忘れますの。其の鶴は、あの、貴客、此のお宮様のおつかはしめでございますつて。夢にばかり見えるのではございません、時々石壇の下の石の手水鉢へ遊びに來ますよ。」

「手水鉢へ、鶴が。」といつて江島は腰をずらし

て瞰下した。要こそあれ、石壇を上らうとした坂の下に、注連を張つて石の手水鉢、凡そ疊二疊ばかり切立の四角な、其角々の圓いのに、何の飾もなく、唯うつろに水を湛へた、然も、何となく神寂ひた気品があつて、傍に建机して、壽 千歳之鉢と誌したのがあつた。

「彼かい、姐さん、」

「はい、舊はお城のお庭にございました、其の時分から一羽の鶴が時々来ては、羽を洗ひましたと申します。此處へ御先組を祀ります時分には、八重葎の中に埋れて居りましたのを、掘出して移しましたさうですが、重くつて、上まで持つて上られませんかので、彼處に据ゑましたと申しますよ。繪に描きましたので美しい優しい姿でございますけれども、其は、どんなに美しく優しうございませう。私 は、親とも姉とも、友達とも、力になる人とも思ひますから、斯うして一人で居りますのでございます、他へ参りますと最う逢はれはすまいと思ひますもの。」

江島は聞いて餘りの事に、

「其でも御亭主が出来たら、何うします？」
敢て顔の色も動かさず、娘は黙つて差俯向いたが、
「でも、あの、あんな優しい、好い者はなからう
と思ひます、皆酷い人ばかり、神様の屋根を盗むの
さへありますもの。」

否、此處に我、と思つたが、丹頂の鶴に比すべ
くはあらぬ身と、江島は何も言はなかつた。しばらく
娘の状を見て、

「姐さんは其の鶴のやうだよ。」とつく／＼言つ
て、江島は不圖汚はしい世辭を言つたやうに思ひ取
つて、我ながら恥て首を垂れた。

手持不沙汰で土瓶を傾むけると、暖さに渴い
たと見えて、雫もない。

「注して参りませう。」

「否、澤山。」

「可うございますよ、鐵瓶を掛けて來ましたから、
今度は熱いのを。」といつて、其まゝ取つて後
姿になつた、娘はいそ／＼壇を下りる。

肩附、襟脚、黒髪の艶さ、耳許の清らかさ、

江島は何となく疎然として、娘が門を入つた時、身を正しうして立つた。途端に鳥の影、はら／＼と翼白く、千歳之鉢に鶴が下りた。而して、生類の内、最も氣高い、優美な態度で、すらりと歩行いた。

【完】